
幼児の木材を使った制作について

清水郁太郎

要約

「幼児の木材を使った制作について」幼稚園教諭にアンケート調査を行い、保育現場での木材を使った制作活動の様子を調査した。約半数が一度以上、さらにそのうちの約半数が複数回活動を行った事があると回答した。今後、現状の継続または新たな環境整備ができれば同活動を行いたいかについては9割以上が希望していた。その理由は、子どもが制作に興味を持つ・工夫をするようになるなどが多い。

積極的な活動の障害となっている最大の要因は、材料の調達に容易ではない事である。現代の生活では簡単に木材の端切れを入手できない状況がある。現場で使用されていた木材は枝や流木などの自然の木材が多かった。板や角材の端切れが手に入りにくい背景と自然志向、両面の表れと考える。その他に指導法や道具面で不足を感じている面もあった。

このような現状を見て、幼児にとって良い造形活動と考えられる木を使った制作を活発にするために、木材の調達の新たな工夫、簡単な木工制作技術が広く伝わる事が必要と考える。

I. 背景・目的

現代の生活において家庭で使われる道具や家具が手作りの物であることはかなり少数で、大半は既製品である。素材も自然の木材は一部で、合板や合成樹脂・その他の工業的な材料が多い。住宅を建築する際にも部材はほとんど工場の下処理されてくるので、現場で大工が木材を切ったり削ったりする場面は減ってしまった(林野庁/森林・林業白書 第1部 第1章 第2節 木材需給の変遷と木材産業の対応より「建築部材のプレカット化の進展」参考)。このような環境において子どもが木を加工する様子を見ることや、木の端材を手に入れる機会はかなり少ないと言えよう。木の枝であれば公園や自然の森・街路樹などで入手可能な地域は少なくないと考えられる。

人工的な素材の工業製品に囲まれた現代だからこそ木製品の心地よさに対する評価は一定以上の物があり、子どものおもちゃにも木の物を取り入れたいという声は多い。また幼児教育において子どもと自然物との関わりを大事にしたいという考えを否定する者はないのではないだろうか。

本研究では幼児の木材を使った制作について幼児教育現場の状況を調査し、制作の内容や保育者の考え、取り囲む環境などを明らかにし、木材を現代の幼児教育の中でどのように生かすことができるのか考察したい。

II. 調査方法

「幼児の木材を使った制作について」のアンケートを実施し分析する

対象：北海道後志管内の幼稚園教諭 68名(100%回収)

調査日：2016年11月26日

調査内容：

1. 木材を使った制作の実施頻度
2. 制作内容・工程
3. 制作児の年齢・性別
4. 使用した道具・補助材料
5. 制作した場所
6. 木材を使った制作の長所
7. 制作を行っていない場合の理由
8. 今後の希望・その理由

Ⅲ. 結果・分析

1. 木材を使った制作の実施頻度



図1

- ①半数が木材を使った制作を実施している。
- ②親子活動として取り組んだというものが5例あった。

2. 制作した内容について(複数回答含む)

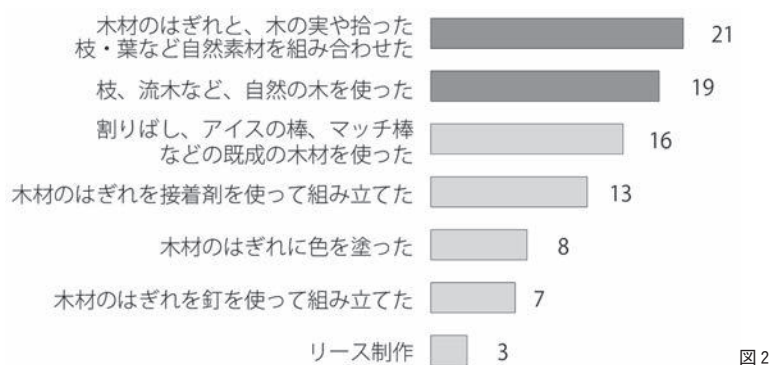


図2

- ①木材のはぎれに木の実・枝・葉などを組み合わせたり、材料そのものに自然の木を使うなど身近な自然を生かす制作が多かった。

3. 取り組む子どもの年齢・性別



図3

- ①年長児による制作が多い。
- ②性別による差は少ない。

4. 道具や補助材料の使い方について(複数回答含む)

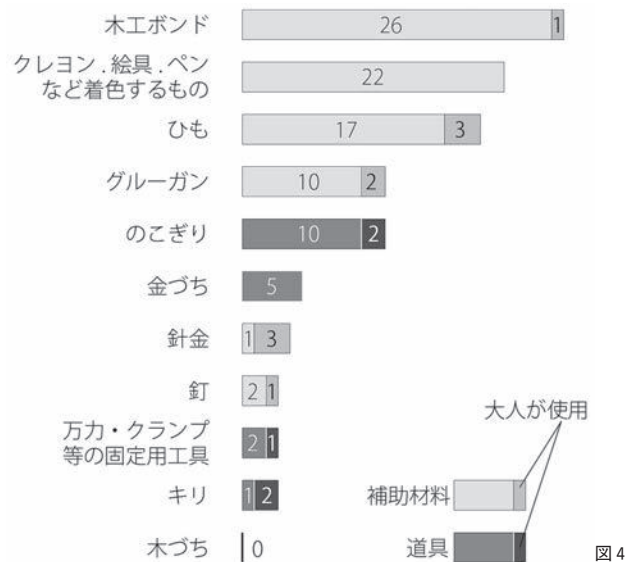


図4

- ①木工ボンド・着色材料・ひもなど安全性の高い物を子どもが多く使用している。
- ②物と物をくっつけること、着色などの活動が見られ、切る・穴をあけるなどは少ない。
- ③その他の記述回答にはハケがあったのみで、木工専用の道具などは見られなかった。

5. 木を使った制作をする場所について(複数回答含む)

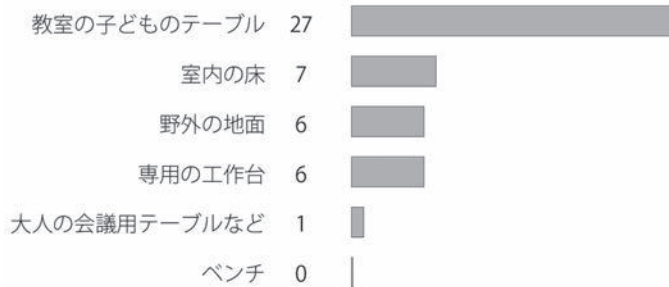


図5

- ①教室のテーブルが過半数を占めた。
- ②釘・金槌を使う作業は専用の工作台か地面で行われていた。

6. 木を使った制作の良いと思う点について(主な物を2~3点選択)



図6

①子どもの主体性につながる多様な長所が認められた。

②その他の自由記述では「身近な物で様々な体験ができる。自然への興味が高まる。雰囲気のあるものができる。」などがあった。

7. 木を使った制作を現在行っていない理由について(主な物を1～2点選択)

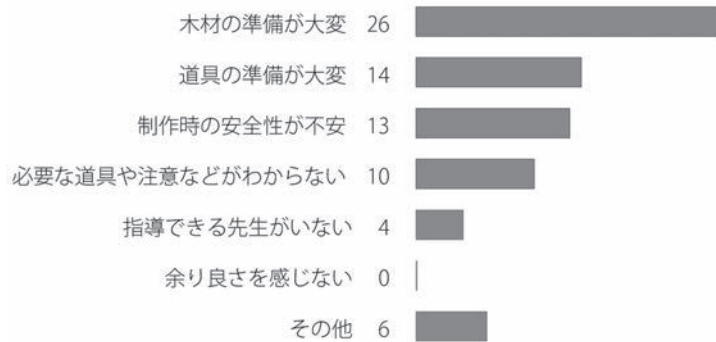


図7

①木材の準備が大変という点が大きい。

②「良さを感じない」という回答は無かった。

③その他の自由記述では「時間がかかる・専用の場所が廃止された」などがあった。

8. 今後(環境が整ったら)木材を使った制作を取り入れたいか?



図8

①9割が現状の継続か環境改善により木材を使った制作を取り入れたいと考えている。

9. 木材を使った制作を取り入れたいと思う理由について 自由記述の分類



図9

①6.の結果と関連性が高いが「自然物との関わり、木の良さを感じる」などが新たに見られた理由である。

②「多様な素材体験・いろいろな経験」など木材に限らないが、制作活動の幅を広げたいという面も見られた。

IV. 考察

今回の調査では、約半数の保育者が何らかの形で幼児の木材を使った制作を行っていた。その中で1度で終わってしまった場合が約1/3、何度か実施している場合が約2/3で、そのうち定期的に実施していたのはわずか数例だった。このような現状がある一方、9割の保育者が「今後木材を取り入れた制作について環境を整えば実施したい」と答えている。実施の障害になっている最大の要因は「木材の準備が大変」という事である。これは安価な輸入家具店の影響で地元の家具工場が減り（農林中金総合研究所／家具向けの木材需要 国産材利用の可能性より「木製家具の製造品出荷額と輸入額の推移」参考）、連携業者の材木店も同様に減っている状況や、冒頭で述べた住宅建築現場での端材減少の傾向などにより、かつては可能だった木工関係者からの端材提供が極端に難しくなっていることの影響がひとつ考えられる。また家庭や商店などで商品を梱包していた箱が木製であるという事も稀なこととなり、身近な木材は非常に少なくなった。

このような状況の中、ホームセンターの店舗数は増加傾向で木材、併せて木工道具の販売は盛んである（日本DIY協会／「年間総売上高とホームセンター数の推移」参考）。一般消費者の木材需要の表れともいえるが、子どもの制作に適した状態とまでは言えない。ホームセンターでは切り売り加工も行っているので、その端材を生かす方法は今後考えられるのではないかと。

板や角材の端切れが手に入りにくい現状と、自然物への関心の両方の要因が考えられるが、調査では「木材は自然の枝を使った」という回答が多かった。幸い北海道ではまだ自然に囲まれた地域も多く、都市部でも公園や街路樹の剪定など小枝程度の木材は手に入る。調査の中で釘と金槌による加工は少なく、ひも・ボンドなどの使用が多かったのは、平面状の木材ではなく枝などの不定形な形を接合しようとしたことも影響したと考えられる。今回、使用している枝の太さを調査しなかったが、太さ2〜3cmまでの枝であれば子どもにも加工が可能である。加えて、製材された木材が手に入りにくい現状の中、表現の幅を広げるとすれば、太さ4〜7cm程度の枝を大人がのこぎりで切り分け、場合によっては半割りにするなどは、少しの環境整備で可能なので材料調達の1案として考えられる。

木材を使った制作の良い点に多くあげられた「子どもが制作に興味を持つ」「工夫をするようになる」は、どちらも造形指導の主要な目標である。子どもの活動や意識が具体的に木材を使った制作のどの点に関連しているのかは今後詳細な調査を要するが、現段階で、『木材の自然素材であるがゆえの不均質さ・不定形さが、子どもに興味を持たせるのではないかと。また柔軟でありながら一定の強度があり、加工や接着もたやすいことが工夫しようとする意欲につながるのではないかと』と考える。

「万力などの材料を固定する道具、のこぎりを使った加工」など本格的な制作環境、制作技術もごく一部に見られた。安全で効率の良い木材の加工には材料の確実な固定が不可欠であり、たとえば釘を打つためには作業台が固く重たいことが重要である。「必要な道具や注意がわからない」は、木材を使った制作ができない理由としては多くなかったが、木材工芸を専門としている筆者の立場から判断すると実際は簡単な加工でもいくつかの知っておくべきポイントがある。その認識が広がると制作技術の幅が広がり、材料が手に入った時にはもっと取り組みやすくなるのではないかと。

本研究では子どもの木材を使った制作の有効性、そして材料の調達の問題が明らかになった。材料がある場合は簡単な木工技術の情報提供も必要と考えられる。木材が豊富な北海道で、子どもたちが興味を持ち造形活動が豊かになる「木材を使った制作」をもっと活発にするために今後も研究を継続したい。

V. 参考文献

1. 平成26年度 森林・林業白書／農林水産省林野庁(2015年)
2. 家具向けの木材需要 国産材利用の可能性／農林中金総合研究所(2016年)
3. 年間総売上高とホームセンター数の推移／一般社団法人日本ドゥ・イット・ユアセルフ協会(2016年)